

秀賞

兄の背中

青森県むつ市立川内中学校

2年 佐々木 逢有

「ああるー、スーパーに行くー？」

私の名を呼ぶ、聞き慣れた兄の声、言葉。だから私もいつものように「行くー。」と返す。

私が住むのは、海に面したのどかな田舎町だ。どのくらい田舎かというと、多くの生徒がスクールバスを利用しないと学校に通えず、野生のサルやカモシカ、リスなどが普通に道路を歩いているくらいには田舎だ。私の家から歩いて15分くらいのところに町で一番大きな（ほぼ唯一の）スーパー・マーケットがある。兄はよく私を連れてスーパーに行く。歩いている間に会話はない。スーパーに着いても何も喋らない。買い物するルートはもう見飽きたものだ。お菓子のコーナーなどをひと通り歩く。ようやく兄が口を開くのは、「電子マネーでお願いします」という会計の時。会計は全部、兄に任せる。

帰り道でも、私たちに会話はない。スマホで夜の風景を撮る兄と、音楽を聴く私。何も喋らないのに、目の前に兄がいると安心し、落ち着く。私はこの時間が好きだった。

翌日、学校で友達が兄弟の話をしていた。「昨日もまた喧嘩した」「俺の家も」「マジであいつウザい」。私の友達には兄弟喧嘩をしている人がたくさんいる。喧嘩するほど仲が良いとも言うが、私と兄はほとんど喧嘩をしたことがない。でも、仲は良い。近所に住む同年代の友達が少ないともあり、小さい頃から二人で遊ぶことが多かった。夏は二人で海に行き、冬は庭でスノースケートをした。五つも年齢が離れていて思春期を迎えたはずなのに、兄はなぜか私を遊びや買い物に誘う。兄の頭は空っぽの箱のようなものなのかな。兄の考えはよくわからない。そんな、変化はないがそこそこに楽しい毎日を過ごしていた。

私は中学1年生になり、兄は高校3年生になった。ある日、兄が今までに見たことがないような真剣な顔で両親に話しかけていた。「近畿地方にある大学に進もうと思っている」「実はずっと、部屋の中で大学のことを調べていた」「オープンキャンパスもあるから連れて行ってほしい」。正直なところ、この言葉を聞いた私は頭が真っ白になった。なんとなく、兄は大学には行かずに地元で就職し、この家にいると思っていた。しかし、「音楽系の道に進みたい。もしそこでダメだったとしても、教員免許も取れる学校だから行かせてほしい」という兄の力強い言葉。比較的やりたいことを否定しない両親は兄の大学進学を許可

し、オープンキャンパスにも連れて行った。それからは、兄がその地域や大学にどんどん魅了されていくのが、私でもわかった。この気持ちは揺らぐことはないだろうと思いながら、残り少ない兄との時間を過ごした。

冬を迎える、兄は志望校に合格した。ずっとそこにあるはずの毎日が、もう終わりに近づいていると思うと、なんだか嫌だった。

「ああるー、スーパーに行くー?」「……行く」。今日も会話のないスーパーまでの道のり……と思っていたのだが、「ああるは大学に興味ないの?」と聞かれて驚いた。私はとっさに、「あるよ。県内の保健大に行こうと思ってる」と答えた。「そっか、いいね。」それきり、兄は何も喋らなかった。

やっぱり兄は不思議だ。結局、最後まで何を考えているかはわからなかった。けれど私には少し思うことがある。兄は口に出さないだけで、最初から遠くの大学に行こうと思っていたのだと。だから、家以外でも私と過ごしてくれようとしていたのだと。私は、兄に感謝している。人見知りの私をいろいろな場所に連れて行ってくれたこと。優しくしてくれたこと。一緒に遊んでくれたこと。兄は私にとって欠かせない存在だったと、兄がいなくなつてから気づく。それと同時に、いつまでも兄に頼ってばかりではいられないことにも気がついた。

私は今年、ソフトテニスを始めた。実は中学校に入学する時に一度やってみようと思ったのだが、あきらめてしまったのだ。周りの子は小学生の時や、遅くとも中1からは始めているので怖い部分はあったが、思い切ってチャレンジしてみた。毎日の練習は厳しい。でも、この間、初めて出た大会で1勝することができた。この1勝の喜びは、あのままソフトテニスをあきらめいたら味わえなかつたものだろう。それから、生徒会に所属していろいろな行事で人前に立って発表する練習もしている。

私をいろいろな場所に連れて行ってくれた兄はもう近くにはいない。だから、今度兄が帰省したら、私から「スーパーに行くー?」と誘つてみよう。そして、話すのだ。音楽の話、ソフトテニスの話、そして大学の話。

これからは兄の背中を追うのではなく、兄の隣に並べるように前を向いて歩こう。あのスーパーマーケットの、もっと先まで。